

桜の蕾が頬を膨らませ、春を感じる季節になりました。
お久しぶりのコラムです。

前はレヅジョエミリアの理論的なお話でしたが、
今回は「生きる力」と哲学的なお話を持ってきました。
ミントリーフつくばでは、「生きる力」を培う保育を、真髓としています。

今回は、「生きる力」って何？育てるにはどうしたらよいの？
そもそも大人達の生きる力は大丈夫？これからの保育に必要なことは？
そんな新年度一発目に相応しい、大きなテーマでお話していきます。

○このコラムで伝えたい3つのポイント

- ・ 子どもの問題は子どもで解決する
- ・ 脱、過保護が「生きる力」を育てる
- ・ 不完全こそ尊い

それでは、参りましょう。

まず、近年の小学校事情について、リアルの声を聞きたいと思い、
数名の小学校教員、小学生をもつ保護者の方の話を伺いました。

- ・ 自分の家の子どもが他の友達に強く指示されたとのことでだけで親から電話が来た。
- ・ 消しゴムを無くしただけで、イジメと騒がれた。
- ・ 授業参観で棚の埃を見つけて、子どもが喘息になったらどうするのと指摘を受けた。
- ・ 子ども同士が走ってぶつかっただけで、学校に親同士が呼び出されて面談をした。

このような事案があったようです。

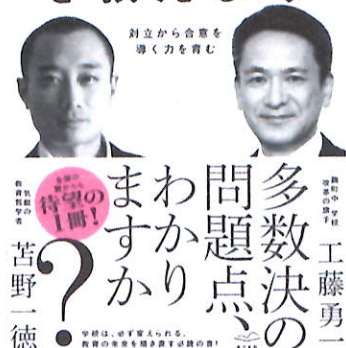
また、【こどもたちに民主主義を教えよう】

著者 苦野一徳

の本の中で、次のように触れています。

～日本の教育界で問題なのは、子ども間で起きるトラブルを、大人の問題とすり替えて、メディアや行政が「子ども同士のトラブルは大人が解決するものだ」と錯覚をさせてしまっている。そして子ども自身の当事者意識を奪い、「生きる力」を衰退させるのです。

子どもたちに民主主義を教えよう



またさらにいじめについても、次のように言及しています。

文部省がいじめの定義を、ある時から「子どもが嫌がることすべて」にしてしまったため、小さいトラブルでも大人が介入するようになり、本当に助けが必要な事案が埋もれてしまう。そして、いじめや悪口に過敏になり、常に不安を感じるようになった。～

事案でもあったように、子どもの問題なのに大人ごとになっていますよね。

私は常日頃、スタッフ達と、さまざまな保育論を勉強したり、保育方法を試してみることは良いこと。ただ、「見守る保育」という軸はブラさないでほしいと伝えています。喧嘩が起きても、できるだけ子ども同士で話し合い、大人がジャッジするのはくれぐれもしないようにしよう。と話しています。

そして小さい怪我の大切さも、自園の保護者の方々には、ご理解いただいております。

そこには子どもの当事者意識を持つこと。

子ども自らが失敗を繰り返し成長していくところに意義があるためです。

無菌室で育てば抵抗力がなくなるのと一緒に、安全に管理されすぎた場所は、社会性も身につかず、自ら危機管理能力を低下させます。

それなのに近年の日本は角が立つものは、丸くされて、綺麗な環境であればあるほど、子どもに良い影響があるという風潮になってきていると感じています。

例えば、最近の童話はコンプライアンスを気にしすぎて、マイルド化しているとのこと。

桃太郎の鬼も、刀で切られず、赤ずきんの狼も、石を詰められず、謝ってハッピーエンド。それで良い影響を与えられたと満足するのは大人の都合で、これこそまさに大人の主張が一人歩きした結果だと思うのです。

かといって過保護になってしまうのは、一個人の問題ではありません。

飽和時代、ネット社会による選択肢の拡大がもたらす情報の錯乱や偏り。SNSを通して人と比べて優越を感じてしまう。少子化等の影響で1人の子どもに対する期待値が高まる。

しっかりと育てなければならないという日本全体の雰囲気や集団圧力。

様々な環境も折なって、不安でいっぱいになるのです。

そのため私達の役目は、過保護な親を指摘するのではなく、まず、不安でいっぱいの親も誰1人取りこぼさないよう、まず目の前にいる人から、温かく関わっていく。

そして不安由来の過保護を溶かしてあげられるような社会を作っていくことです。

「子どもを信じて、見守る。」

その覚悟は子ども、そして大人自身の自律になっていくのです。

脱・過保護が生きる力を育む、子どもの問題は子どもが解決する。

現在、日本では生きる上で必要なものは、すでにほとんどがそろっています。
飽和時代を生きる日本は、衛生的で安いものが簡単に食べられて、サービスまで素晴らしい。どこに行くにも、不便のない車や電車がある。コンビニで生活に必要なものはほとんど手にある。

家には暖房や冷房があって、ふかふかの布団で眠れる。

おまけにネット社会、勉強も娯楽もスマートフォン一つで簡単に手に入る環境です。

普段の生活を文にすると、こんなに心地よい環境に溢れているんですね。

ところが、これだけ満たされた環境にいても、不平不満を嘆いたり、まだ足りないともっとももっとと傲慢になる。それでも乾き続ける私達。

そのパラドックスを解く鍵は「不完全さ」にあると考えます。



私はフィジーという国に、縁がありしばらく住んでいたことがあります。

去年もお休みをもらって1週間フィジーのジャングルの中で暮らしていました。

ご飯は焚き火や石焼き芋のような要領で調理して、寝る時も布団はなし、シャワーは雨水を溜めたもので、もちろんお湯はでない、洗濯は手洗い、衛生環境もなかなかなものでした。

まだまだ中進国のフィジー。

しかし、世界一幸福な国とも言われているのです。

滞在させてもらった家族だけでなく、フィジーの人達は、本当に温かい。

雨が降れば、全く知らない人でも家に招き入れてくれて、雨宿りをさせてくれたり、バスを乗り過ごしたら、わざわざ戻ってくれたりする。

スーパーでは気軽に話しかけてくれて、英語がなかなか出てこなくても、ゆっくり待っていてくれる。

貧しくても、自分のものはみんなのものと、いつも分け与えてくれます。

また、自給自足が基本で、木に登って、果物を取ったり、島中に親戚が住んでいて、作った野菜をあげたりもらったりしている。そしてなんと自宅を自分達で手作りするのも珍しくないとのこと。

子どもたちと遊びに行っても、断崖絶壁のところ、登り降りを楽しんだり、波の迫力だけで、家族で大笑いしています。遊ぶものも、おもちゃなどはなく、木の破片を見つけて、それでハンカチ落としのような遊びを考えたり、少し私が空手を教えただけで、一日中練習しています。



日本ではたくさんのおもちゃに溢れていても、子どもたちが「つまらない」「遊ぶものがない」ということがあります。真面目な日本の保育者は、もっともっとおもちゃを増やさなければと、考えてしまいましたが、もう少し違う角度からも見てほしいのです。もちろん、その時の子どもの姿に合わせて、環境を整えることは大切ですが、多ければよいというものでもないのです。なければどうするかを考える力、想像、創造力、みんなで話し合うコミュニケーション力を伸ばすチャンスにもなるのです。



フィジーの人たちは、不完全な環境にいても、毎日楽しそう、明らかに、子どもも大人も一人一人が自立し、自分の頭で考え、生きているのだということ、強烈に感じました。



その一方で、ある程度豊かで、便利で、完全に近い私たち日本人は、打たれ弱く、幸福よりも不幸に過敏になってしまっています。いうならば「幸せインフレーション」が起きていると感じます。少し注意されたらパワハラ。残業したらブラック企業。メディアの力も大きいと思いますが、自己防衛本能の過剰さで人生を自滅させているとも感じるのです。

さらに、その完全に近い環境は、自分の実力ではなく、先人達の努力や海外輸入に依存していることでつくられている、頼りなさにもあります。

また、フィジーの人たちは、不完全である自分、相手、環境を認めて、助け合う形がデフォルトのため、他人と比べる不毛な悩みもないわけです。

不便さが人との繋がりを強くして
不完全さが心の豊かさと生きる力を強固にします。

シンプルに言えば生きることに必死になれば、悩みは断捨離され、自然と生きる力が育つものだと実感しました。

私たちは当たり前にある、恵まれた環境に感謝することはもちろんのこと。不完全さこそ尊く思い、ハングリー精神に火をつけて、生きる力を目覚めさせましょう。

おわりに

人生はユートピアではない。

保育士がというような話ではないかもしれませんが、私は理想を叶えるためには、まず現実を知ることが、大切だと考えています。

かつて、高度経済成長の中ではロボットのように、「大人の話をも素直に従える子ども」を育てるための、軍隊式、一斉保育がされていましたが、今は「自己肯定感」を高める、丁寧に関わる保育が人気となりました。想いは、ミントリーフつくばの方針も一緒です。ただ、流行りにまかせて「自己肯定感」という言葉だけが、一人歩きして、「ただ甘やかせばよい」となったり、根拠もないのに、イジメはない、絶対幸せになれる、これから先も日本は安全なんだというのはあまりにも傲慢ではないかと思うのです。イジメられないように、必死で大人が守り抜く、不幸が訪れないように、少しでも理想と違ふと感じたら、遠ざけてあげる、転ばぬ先の杖を用意して、常に安全な環境を作ってあげる。

前章でも触れたように、それはかえって、危ういと感じます。失敗は怖いものではない。失敗を知らないことが怖い。

あくまで、「人生は色々ある」が前提。楽しいことも辛いこともある。

だからそれを乗り越えていける、非認知能力を共につけていこうとするのが、今後求められる保育者のあり方だと考えるのです。

困難が訪れた時に、自分でやり抜く力。何度も立ち直るレジリエンス。「助けて」を言えるコミュニケーション能力、かといって誰かには依存せず、自律心を持てる力。瞬く間に変わる時代の変化に怯えない逞しさ。世界は広いんだと、視野を広くする力。周りに流されず、自分の興味を探究出来る力。そういった力がますます大事になってくる時代です。

また、いままでのコラムでも述べてきたように
甘い、厳しい。正しい、悪い。と二極化しないこと。
知り得た情報を鵜呑みにして「絶対」正しいと執着することをしない。
目の前の子どもをまず観察、そこからどの保育が良いか薬剤師のように調合していく。

ツールに惑わされず、本当に子どもに必要な保育を私達は心がけていきます。

また一年、喜怒哀楽が溢れて、充実した日々を送れますように。
今年度もよろしくお願い致します。